

展 望

農村地域における個人化の進展と新たな地域主体のデザイン

京都大学大学院地球環境学堂

星 野 敏
(HOSHINO Satoshi)



農村地域の持続性の危機

田植えの終わった水田の水面に映る景観、きれいに草刈りが済んだ畦畔、用水路を流れる水の音、稲刈りの後に整列した稲株など、多くの地域で、今なお美しい農村景観が維持されている。しかし、空き家や耕作放棄地、廃棄された農業資材、竹林の拡大などが近年、顕著にみられるようになってきた。これまでは農家が自身のプライドにかけて身近な農村空間を美しく管理してきたが、それが立ちゆかなくなりつつある。

農村地域の人口を DID 地区人口で代表させると、DID 人口の統計を取り始めた 1960 年以降、減少し続けている。この間、過疎化、少子高齢化、限界集落、人口減少社会など、農村地域の人口減少をめぐるいくつものキーワードが登場し、そしてさまざまな対策が講じられてきたが、総じて論ずれば、緩和はできても解決にはほど遠い状況にある。人口以外の指標、たとえば農業就業者や農地についても同様である。美しい農村景観は長年にわたって直面する農村の持続性の危機を覆い隠してきたが、農村景観の「ほころび」はそれが限界点に達していることを示唆している。

個人化による農村の変化

農村地域は外的環境の変化を受けてきた。高度経済成長期に都市化・工業化が進み、農村の生活様式が大きく近代化し、過疎化・混住化によってコミュニティ内部の異質化が進んだ。また、個人主義的な価値観が農村地域に広く浸透していった。家族形態に着目すると、農村地域においても家族規模の急速な縮小と核家族化が進んだ。しかし 1990 年代あたりからは、都市化・工業化などの単純な近代化の過程とは異なり、グローバル化にドライブされた別の変化が生まれ、それが農村地域にも波及しつつある。個人化とリスク社会化である。個人化とは、職業、ライフスタイル、人間関係、消費などのあらゆることが、社会の規範や規制といった枠組みによらずに、個人の選択の対象になってきたことを意味する¹⁾。また、リスク社会の定義には幅があるが、ここでは一層の個人化が進むことで、リスクが人間生活を支えてきた家族や社会組織、安定した職業

システムを乗り越えて、直接個人に降りかかってくるような社会と理解しておく。

都市地域が主たる対象ではあるが、2010年1月には、「無縁社会」と題したNHKスペシャルが放送された。終身雇用制度の崩壊、地縁・血縁社会の溶解、家族や社会とのコミュニケーションの希薄化、未婚率の上昇などにより、社会から孤立する者が増加し、都会での自殺や孤独死が増加している点が社会問題として取り上げられた。農村地域の場合には、集落や家という社会的枠組みがあり、かつそれがある程度は機能していることから、都市地域と同様の事態に直面しているというわけではない。しかし、今後農村地域においても、「個人化」による基層の地殻変動は世代交代とともに着実に進むであろう。

たとえば家業と家産が一体となった継承システムのうち、まず家業継承が崩れ、家産のみが継承されるようになった。そして、不在村地主や所有界を知らない相続人の増加が象徴するように、今日では家産の継承システムも十分には機能していない。自治組織の意思形成は以前と同様に高齢男性によって担われているが、農村集落の内部をミクロに見ると、個人化の進展によって、家の輪郭が薄くなり、世代や性別などの個人属性によるグループがより顕在化してきた。一枚板であったはずの集落内部で、高齢男性のリーダー層と若年層や女性グループとの間に意識のギャップが拡大し、前者が後者の意識をうまく包摂しきれていない状況が各所で生まれている。

個人化を見越した地域主体のデザイン

農村地域で空間を管理し、資源を維持する主体は農村地域の住民であり、農村集落の自治組織である。近代化とその後の個人化により、これらの地域主体が大きく変化しているが、地域や行政の努力（施策）だけでこの流れを止めることが困難であることは冒頭で述べたとおりである。むしろ、これから世代交代とともにこの流れは急速に進むであろう。そこで、この個人化を元に戻すことができない変化であると潔く受け入れ、諦観することを提案したい。

問題は、定住人口の減少傾向は今後も継続すること、また、農村地域においても世代更新とともに個人化が一層拡大することを前提に、それをいかに乗り越え、よりよい未来につないでいくかという点にある。さらに付言するならば、現在、村づくりに取り組んでおられる関係者の多くには反感を持たれるかも知れないが、恐らく、現在とは異なる不連続な未来、すなわち個人化の流れを見越した新たな地域主体をデザインする必要があるだろう。

個人化には、個人によるリスク負担が増大する、既存の地域組織と個人との間に軋轢あつれきが生じやすい、地域や郷土への帰属意識が低下するなどのデメリットが予想されるが、逆に、個人の自由度は高まるため個性を発揮しやすくなる、地域内・外から潜在能力を活かしきれていなかった人材の再チャレンジが容易になるなどのメリットもある。課題解決に必要な社会的ネットワークを個人が自前で構築すること、地域住民、特にリーダー層が受入れの意識を改革することなどの条件が整えば、むしろ若い人にチャンスがたくさんあるようにもみえる。個人化のメリットを活かしつつ、デメリットを押さえ込めるような次世代のイノベーターを育て、それを農村地域のシステムに埋め込むことが求められる。

引用・参考文献

- 1) 小田 亮：現代社会の「個人化」と親密性の変容—個の代替不可能性と共同体の行方 (2013), <http://d.hatena.ne.jp/araiken/20130106/1357487712>
- 2) 池上甲一：むらの資源を研究する—フィールドからの発想, 農山漁村文化協会 (2007)
- 3) NHK「無縁社会プロジェクト」取材班：無縁社会, 文藝春秋 (2010)
- 4) ウルリッヒ・ベック, 鈴木宗徳, 伊藤美登里：リスク化する日本社会—ウルリッヒ・ベックとの対話, 岩波書店 (2011)
- 5) 橋本俊詔, 長谷部恭男, 今田高俊, 益永茂樹：リスク学とは何か (新装増補 リスク学入門 1), 岩波書店 (2013)
- 6) 牧野 篤：「つくる生活」がおもしろい—小さなことから始める地域おこし, まちづくり, さくら舎 (2017)

[2017.10.18.受理]